

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp

## 「持続可能な開発目標(SDGs)と国際開発研究科」

研究科長 伊東 早苗

国際開発研究科は今年、創立25周年を迎えました。同時に、今年  
は国際社会が新しい開発目標に向けて動き出した記念すべき年でも  
あります。国連は昨年9月、2000-2015年における国際社会の目標  
である「ミレニアム開発目標 Millennium Development Goals,  
MDGs」に続く新たな開発目標「持続可能な開発目標(Sustainable  
Development Goals, SDGs)」を採択しました。この目標は2016年から  
2030年までの国際社会における行動規範となるもので、各国政府  
は目標達成のための政治的コミットメントを強く求められています。

SDGsがMDGsと区別される大きな特徴は、これらの目標を達成す  
べき「開発の当事者」には、開発途上国だけでなく、先進国も含ま  
れるということです。MDGsは、開発途上国の貧困削減を中心とする  
課題の解決を目標とし、先進国の役割は、目標達成に向けて開発途  
上国を支援することでした。一方、SDGsが求める達成目標の中には、  
先進国内における貧困を削減することや、消費と生産のあり方を見  
直すことも含まれています。

MDGsからSDGsへの移行は、25周年を迎える国際開発研究科に  
とって重要な意味をもちます。なぜならば、それは戦後70年の間に構  
築された「国際開発」という概念がもつ意味合いと焦点が、新しい枠  
組みのもとに再構築される過程と軌を一にするからです。新たな「国  
際開発」の概念は、途上国が先進国になることを目指して歩む単一の  
道のりではなく、先進国と途上国がともに現在のあり方を見直し、地  
球環境と共存を図りながら、将来の世代に受け継ぐことのできる「豊  
かさ」を実現するプロセスであると言い換えていいかもしれません。

もちろん、こうした考え方は昨年になって  
突然浮上した新しい考え方ではありません。  
欧米的な近代化の推進を「開発」とみなす考  
え方は、1970年代から批判にさらされてきま  
した。また、「持続可能な開発」という概念は、  
1980年代後半に公刊された『ブルントラント  
報告』以降、様々な形で国際社会に影響を及  
ぼしてきました。今、新たな「開発」概念の再  
構築が求められる裏には、国際的な経済地図の変化と、それを背  
景にした「開発協力」の組み替えがあります。新興国の台頭と、彼ら  
が推進する南南協力の実践により、開発協力に関わるアクターや資  
金源の多様化が進みました。それにより、OECD開発援助委員会の  
メンバーである伝統的な援助国が戦後築きあげてきた援助規範は  
変貌を余儀なくされ、新たな開発協力の規範構築が求められていま  
す。その過程で、新しい「国際開発」の枠組み作りがすでに始まって  
おり、「開発」の対象はグローバルに拡大されています。



こうした国際社会の大きな変動期に、ダイナミックな変化を生み  
出すアジアに身を置く国際開発研究科は、新たな国際開発の枠組  
み作り積極的に参画し、知的貢献を果たすことを強く求められて  
います。7月末に計画される研究科創立25周年記念事業には、世界  
中で活躍する研究科修士生が集まり、国際開発の未来をともに語  
り合うことになっています。ひとりでも多くの皆さんの参加を、心より  
お待ちしております。

## 名古屋大学大学院国際開発研究科創立25周年記念国際シンポジウム開催のご案内

## 「新時代の国際開発研究と教育：持続可能な開発目標とその先」

## ■開催日時

2016年7月29日(金)  
13:30-18:00

## ■場所 名古屋大学

野依記念学術交流館

## ■使用言語：英語

## ■お問い合わせ：

gsid25@gsid.nagoya-u.ac.jp

- |             |   |   |
|-------------|---|---|
| 13:30-14:10 | 開会セッション 挨拶 松尾清一名古屋大学総長<br>前川喜平文部科学省事務次官<br>高瀬千賀子国連地域開発センター所長                                  | ・ 牛尾滋外務省国際協力局参事官(大使)<br>・ 加藤正明国際協力機構(JICA)上級審議役 |
| 14:10-15:10 | 基調講演「ミレニアム開発目標から持続可能な開発目標へ：グローバルガバナンスはどう変わるか？」<br>デイビッド・ヒューム教授 マンチェスター大学グローバル開発研究所長・英国国際開発学会長 |   |
| 15:10-15:25 | 休憩  |   |
| 15:25-16:35 | ラウンドテーブル1：持続可能な開発のための包含的な経済成長の促進  |   |
| 16:35-17:45 | ラウンドテーブル2：持続可能な開発のための平和で包含的な社会の促進   |   |
| 17:45-17:55 | 総括  |   |
| 17:55-18:00 | 閉会の辞 藤川清史副研究科長  |   |

## TOPICS

## 「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラム

教授 岡田 亜弥

国際開発研究科は、2013年度より文部科学省「博士課程教育リーディング・プログラム」で採択された「〈ウェルビーイングinアジア〉実現のための女性リーダー育成プログラム」を実施している。同プログラムは、本学の教育発達科学、医学系、生命農学の3研究科と共同で開講する5年間一貫の横断的な大学院学位プログラムであり、アジア、そして世界で、ウェルビーイングの向上のために、異文化理解に立脚した国際性と使命感を兼ね備え、グローバルに活躍する女性リーダーの育成を図っている。具体的には、ウェルビーイングの実現に密接に関わる諸課題の解決に向けて、各自の専門分野で獲得した高度な専門性・研究能力を活かし、将来、グローバル企業や国際機関等で活躍できるようにリーダーシップ・スキルやキャリアパスについて学ぶ。2014年度より毎年、上記4研究科から修士課程に入学した学生の中から約20名をプログラム履修生として選抜している。

本プログラムは実践的な教育が特徴であり、東南アジア各国で、地元の行政・大学や国際機関との連携により現場の諸課題を体験的に学ぶ「海外実地研修」、徹底した「英語強化プログラム」、メンター制の導入、そして毎回、第一線の世界的リーダーをゲスト講師に招いての「グローバルリーダー論 I~IV」の開講など、独自の大学院教育を展開している。

インターンシップやゲスト講師とのキャリア相談などキャリア支援にも力を入れており、国際協力機構(JICA)カンボジア事務所や国連人口基金(UNFPA)アジア・太平洋地域統括事務所との間にインターンシップ覚書を締結し、積極的にインターンを派遣している。今後は、ユニセフや国連食糧農業機関(FAO)にもインターンを派遣する予定である。また、7つの国際機関の本部から人事担当者を本学に招き、採用に向けたガイダンスを行う「国連アウトリーチミッション」を東京以外で初めて開催したが、200名以上が参加し大盛況であった。

こうした本学の女性リーダー育成や男女共同参画のための取り組みが高く評価され、2015年5月には、国連機関UN Womenが世界中で展開するHeForSheキャンペーンの一環として、女性の活躍に熱心に取り組む10国家元首・首相、10大学長、10 CEOを世界中から選出し、HeForSheを推進するパイロット事業「Impact 10x10x10」において、本学は10大学の一つに選出された。以来、UN Womenとの連携により、さまざまな活動を展開している。たとえば、2015年5月には、国際シンポジウム「アジアにおける女性のリーダーシップ推進」を本研究科と本プログラムの共催で、本学初のHeForSheイベントとして開催し、Isabel Guerrero氏(MIT上級講師・元世界銀行副総裁)の基調講演や、各界からグローバルリーダーを招いてパネルディスカッションを実施したが、やは

り大盛況であった。

2015年7月・8月には、第23回世界スカウトジャンボリー(於:山口県きらら浜)で、UN Womenと合同でHeForSheブースを出展し、世界各国の若者のジェンダー理解を深めるためワークショップや啓発活動を行った。8月末には、「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム(WAW! Tokyo)ユース・テーブル」セッション[日本国政府, 日本経済新聞社, 日本国際問題研究所, 日本経済団体連合会主催]に本プログラム履修生および教員がセッションに参加したほか、プレイベントとして、本研究科は、ユースリーダー・テレビ会議「ユースの視点から見た包摂的な成長・持続可能な開発・ジェンダー平等」を世界銀行・UNICEF東京事務所と共催し、東京・ネパール・東チモール・アルバニアと本学をテレビ会議で繋ぎヨルダン・パレスチナのユース代表と議論する機会を設けた。

さらに2016年2月下旬には、第1期生を対象に、国際性の涵養、キャリアパス支援とリーダーシップ能力育成を目的として、ニューヨーク/ワシントンDC研修を実施した。同研修では、国連本部、国連日本政府代表部、UN Women、UNICEF、UNFPA、世界銀行、NIH、Brookings研究所、ジョージタウン大学及びジョージワシントン大学(GWU)を訪問し、それぞれ幹部職員によるブリーフィングと討論の機会を得た。本学と同様、Impact 10x10x10に選出されたジョージタウン大学ではジェンダーをテーマにパネルディスカッションが行なわれた。また、GWUでは、日米の社会事情について同大学の学生とのディベートや発表が行われた。参加学生の活発な態度や国際機関の幹部を相手に堂々と英語で質問・議論する姿に2年間の成長ぶりをあらためて実感し、彼女ら・彼らはきっと将来グローバルリーダーになれると確信した。



▲国際シンポジウム「アジアにおける女性のリーダーシップの推進」の開催



▶ニューヨーク/ワシントンDC研修で国連本部を視察



## 海外実地研修 2015

### フィリピン、パラワン州、コロン島での海外実地研修

海外実地研修実施委員会 委員長 新海 尚子

海外実地研修(Overseas Fieldwork, OFW)は、国際開発・国際協力の分野における人材育成を目的とし、1992年より修士1年生を主対象のカリキュラムとして、毎年夏に実施されている。2015年度は、フィリピン、パラワン州、コロン島で9月12日から27日に実施された。フィリピンでのOFWの実施は、2004年以降ほぼ12年ぶりで4回目である。

2015年度は、フィリピン観光省が観光キャンペーン(“Visit the Philippines Year 2015”)を実施していた観光年であったことや調査訪問地が観光開発に力を入れていたこともあり、『観光と開発』をOFWの主テーマに設定し、参加学生が所属する4つのグループも「観光と経済開発」、「観光とガバナンス」、「観光と環境教育」、および「観光と文化」の分野でサブテーマを設定し現地調査を行った。事前調査で撮影した現地の写真を掲げ募集し、フィリピン観光省の魅力的なビデオを交えながら説明したところ、60名近い学生がオリエンテーションに参加した。国内線やホテルの問題もあるため全員参加は難しいと判断し、海外実地研修委員会にて応募書類をもとにフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)公共政策大学院の教員も交えて20名を選出した。その後、最終的には参加者19名(日本人学生10名、留学生9名(内訳 フィリピン人2名、中国人2名、ケニア人2名、ブラジル人1名、カナダ人1名、タイ人1名))、ここにUPLB院生4名が加わり、学生23名、教員GSID 6名、UPLB4名、総勢33名で実施した。

昨年度のOFW参加者へのアンケートで調査手法講義の要望が多くあったため、今年度は構成を新たにし事前講義15回のうちグループワークを除く前半半分にフィリピンの経済、ガバナンス、教育、文化や現地背景についての講義、後半半分に参加型を含む調査手

法にかかる講義をもうけた。加えて、感染症専門医師を招いての安全対策講義、現地でのGSID、UPLB双方の参加者による研修5段階評価も取り入れた。

先住民へのインタビューのため海路を移動したり電気がない先住民のコミュニティでホームステイしたグループもあったり、マニラのADB本部での長谷川理事との会談、調査報告もあり、9月24日には参加日本人学生と日本人教員によるコロン市長の招きで1944年のブスワンガ島の戦いで海に沈んだフィリピン船と日本船の戦没者、命を落とされた市民の皆様への慰霊平和記念式典への参加もあり、コロン市およびUPLBでの調査報告会を含む現地調査地での2週間を終え名古屋に戻った参加学生の顔は安堵と終わってしまう寂しさ、やり遂げた達成感に満ちあふれていた。

最後に、フィールド調査を受け入れてくださったコロン市の皆様、UPLBの参加者の方々、GSIDの引率教員の皆様、また事前講義を担当された学内外の先生方、関係諸機関の方々に心よりお礼を申し上げます。



▲コロン島での報告会后、出発する前。参加者集合写真(コロン島の宿泊施設で)

▼研修を終了し帰国後空港で。参加者集合写真(中部国際空港)



## 国内実地研修 2015

### 大台町での国内実地研修

国内実地研修実施委員会 委員長 宇佐見 晃一

2015年度国内実地研修は、三重県南勢地方に位置する多気郡大台町の協力を得て実施されました。大台町は、国内の農山村や三重県内の周辺町村と同様に、人口減少および若者の流出による過疎・高齢化、主産業である林業の低迷、その結果的現象である地域活力の後退という社会経済的課題を抱えています。これらの課題を解決するために、大台町は様々な政策等に積極的かつ創意工夫を心がけて取り組んできています。それらの中で特徴的な取り組みが、第三セクター方式による林業における雇用創出と、Uターン・Iターンによる町内への移住促進であり、一定の成果・実績を得ています。これらは、言うまでもなく、大台町の魅力が創造され、住みやすさが優れているという証であると考えられます。大台町にとって、森林が重要かつ特徴ある地域資源であることは変わらず、林業の再生・振興、人口の持続的な社会増を促すUターン・Iターンによる町内への移住促進は、引き続き取り組むべき課題です。

2015年度国内実地研修は、事前準備とする国内実地研修特論と現場での研修実習から構成されました。今年度は、これまでの国内実地研修の経験に基づき、研修実習の内容を少しばかり改革しました。前者は、基礎的知識を身につける講義、調査地の開発課題の検討および調査方法論の学びが主たる活動です。後者は、予備調査、

現地調査および結果報告会から構成されています。

研修実習の実施では、大台町長をはじめとする役場職員の皆様のご高配とご協力をいただきました。特に、大台町役場企画課と町民福祉課の皆さんには、事前研修から結果報告まで多くの時間を割いていただきました。また、2015年10月21日～23日に現地調査を実施した際に、宮川森林組合、町内林業関連企業、町内保育園関係者と保護者の皆様、NGOみやがわ森撰組、(株)フォレストファイターズ、一部住民の皆様から頂いた心温まるご高配とご協力も研修実習の実施に不可欠なものでした。この場を借りて、関係者各位に厚くお礼申し上げます。



▲現地結果報告会の様子



▲現地木材加工工場で行った聞き取り調査の様子



▲現地森林経営会社で行った聞き取り調査の様子

## 2015年度 学位授与状況

2015年度に国際開発研究科(GSID)より授与された学位の取得者数は以下のとおりです。

後期課程博士学位取得者は16名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)5名、国際協力専攻(DICOS)4名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)7名です。

前期課程修士学位取得者は62名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)16名、国際協力専攻(DICOS)27名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)19名です。



▲博士学位取得者記念撮影(DID)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOM)



▲修士学位取得者記念撮影(DID)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOM)

## 入学状況

### 2016年度 4月 入学状況

#### 1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	32 29 50	25 15 29	20 15 27
国際協力	25 26 49	16 18 34	13 18 25
国際コミュニケーション	20 14 26	13 9 19	13 9 19
合計	77 69 125	54 42 82	46 42 71

※注…赤は女性、青は留学生で内数

#### 2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	5 12 15	5 9 10	5 9 10 2
国際協力	3 10 10	2 7 7	1 6 6 4
国際コミュニケーション	6 4 7	5 4 6	5 4 6 5
合計	14 26 32	12 20 23	11 19 22 11

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

### 2015年度 10月 入学状況

#### 1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 2 2	1 2 2	1 2 2
合計	1 2 2	1 2 2	1 2 2

※注…赤は女性、青は留学生で内数

#### 2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	3 3 8	2 2 3	2 2 3 2
国際協力	0 1 2	0 0 1	0 0 1 0
国際コミュニケーション	2 2 4	0 1 2	0 1 2 0
合計	5 6 14	2 3 6	2 3 6 2

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数



## 学位取得者のことば

DID Ph.D. (International Development) **Jakeline Lagones**

During these three years I learned from Professors to have a passion for everything that I did, because education is more than imparting knowledge and developing thinking and working skills. It plays an important role in the building of character of a person. Therefore, during my research regarding to the economic and social situation of Nikkei Peruvian in Japan, I had to do many contacts with Peruvian families where the most important was how to link my character with them to receive their history life to obtain good results. Then, attending all GSID seminars supervised by my advisor was one of the most important keys to finish my PhD dissertation, publishing my research papers and doing academic presentations of my research. I am so thankful to GSID members at Nagoya University for all their support.



DICOS Ph.D. (International Development) **SZANISZLAI Peter**

The time I spent at GSID was a great experience both professionally and personally. I would like to thank again my supervisors and colleges for their continuous support. Without their help, I could have never acquired a degree.

Let me give a piece of advice for prospective students: always feel free to ask anytime you need any help. Every person at GSID is ready to support you. Also, make use of the wide resources of Nagoya University. Attend lots of programs, discuss, share and learn. The years you spend at GSID may be hard sometimes, but they might become one of the best memories of your whole life.



国際コミュニケーション専攻 博士(学術)

**蘇 迪亜**

大学時代、学生テレビ局に所属し、アナウンサーの仕事に携わる機会がありました。その時、自分自身の発音を確認するため、音声を録音し、自己モニタリングを行い、練習を重ねていました。このような経験から音声への関心が高まり、大学院では音声学を専攻することにしました。

大学院に入ってから、本格的に音声学を学び始め、基

礎から多岐にわたる学問分野との関連について理解を深めることができました。

この度、博士号を無事に取得できました。終始懇切丁寧にご指導くださった成田克史教授、大名力教授、鹿島央教授に心から感謝申し上げます。



## 公開講座

### 「新時代の国際協力」

教授 **西川 由紀子**

2015年度の公開講座では、国際開発研究科の国際協力専攻の基幹教員が、グローバル化の深化に伴う貧困、災害、資源・エネルギー問題、安全保障の問題に取り組む国際協力について、法、政治、社会と文化の側面から解説しました。全7回の講座の前半では、開発援助と国際協力の全体像を示すとともに、今日の国際協力で注目される取り組み例として、フィリピンの台風被災に関する学生ボランティアの取り組み、資源・エネルギー問題へのアプローチ、法整備支援について解説を行いました。講座の後半では、2015年に特に注目された安全保障の分野から、紛争と民主化及び経済の関係、戦後70年目と被爆者・核エネルギー、我が国の集団的自衛権行使容認とテロ戦争について解説しました。



公開講座最終回の様子▶

### 「調音音声学と音響音声学をやってみる」

准教授 **加藤 高志**

2015年6月13日および14日に「調音音声学と音響音声学をやってみる」というタイトルで公開講座を開いた。内容は以下の通りである。

- ◆調音音声学 (加藤高志准教授 4時間30分)
  - ・音声器官
  - ・気流の起こし、発声、調音
  - ・国際音声字母表の見方
  - ・各字母の発音の練習、聴き取りの練習
- ◆音響音声学 母音 (井土慎二准教授 1時間30分)
  - ・声帯と声道
  - ・母音の音響的性質(フォルマントを中心に)
  - ・Praatの基本操作
- ◆音響音声学 子音 (成田克史教授 3時間)
  - ・発声の有無
  - ・調音方法
  - ・調音位置

実技に重点を置き、1人1人に十分な時間を割けるようにするため、募集人数は10名と少なめに設定した。幸い、応募者も10名だったため全員が受講することができた。

## GSID教員の新刊紹介

### 『 Globalization and Development 』

Volume I: Leading Issues in Development with Globalization  
Volume II: Country Experiences.  
Volume III: In Search of a New Development Paradigm

Published by Routledge, Oct. 2015-Jan. 2016 Shigeru Thomas OTSUBO (ed.)

(ISBN: 978-1-138-78154-2; 978-1-138-78159-7; 978-1-138-93227-2)

大坪 滋(編著)

Globalization and Development is a "cross-national study" on the "interstate dispersion" of the impacts (on growth, inequality and poverty) that international economic integration provides to the economies of the developing countries. In order to present the "Leading Issues in Development with Globalization" in a balanced manner, to identify differences and commonalities among "Country Experiences" in development with globalization, and to introduce diversified development paradigms with forward-looking discussions "In Search of a New Development Paradigm" for the post-MDGs era, this publication consists of three volumes and four main parts. Volume I (Part I) introduces the evolution and facets of globalization, and the challenges that we face in our development efforts under globalization. (Part II) contains thematic and issue-oriented discussions on the key facets of globalization. Volume II (Part III) presents the country case studies from Asia and Africa compiled by local researchers. Volume III (Part IV) presents the diversified development paradigms such as the GNH, the Sufficiency Economy, the Reform and Opening Up from Asia, the African and Latin American paradigms, and the Islamic development paradigm. It stresses the need of preserving diversity in the SDGs-era. These books, the outputs of the first truly international joint research project coordinated by GSID, intend to serve as a unique and comprehensive guide for those in the international development community on the subjects of diversified development paradigms/paths under globalization and other challenges in the post-MDGs era.



### 『 Post-Education-For-All and Sustainable Development Paradigm: Structural change and diversifying actors and norms 』

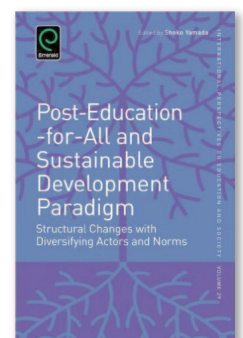
London: Emerald Publishing Ltd.(May 2016)

山田 肖子(編著)

「万人のための教育(EFA)」目標の達成期限である2015年が近づくとつれ、Post-EFA目標に関する議論が高まり、この動きは、ポスト・ミレニアム開発目標(Post-MDGs)のプロセスと並行して展開していった。

本書は、2012年の末頃から2015年5月の世界教育フォーラムで、Post-EFA目標が合意されるまでの言説を、インタビュー及び詳細な定量的・定性的テキスト分析によって紐解いている。

また、アジアの援助国(日本、韓国、中国、インド)及びアジア地域会合での教育協力の意思決定プロセスへの参与観察に基づき、変化過程をグローバル、リージョナル、ナショナルの多層で分析し、「持続可能な開発パラダイム」への移行は、単に目標の改訂だけでなく、意思決定の構造とそこに参加するアクターの本質的変化によるものであることを明らかにしている。



### 『中国経済の産業連関分析と応用一般均衡分析』

法律文化社(2016年2月刊行)

藤川 清史(編著)

本書は産業連関表という統計をフィルターにして中国経済の成長の位相、環境問題、地域間格差などを鳥瞰した実証分析の報告である。本書が扱うテーマは章によって異なるが、分析の手法が産業連関分析と応用一般均衡分析であるという点で共通している。これらの分析手法の精神は、マク

ロ経済の動きは、各産業の動きや産業構造を基礎に分析すべきだということである。本書の目的は、筆者たちが行った実証分析の報告であるの言うまでもないが、それに加えて、産業連関分析と応用一般均衡分析の応用分野が広いことを紹介する目的も持っている。





## 新スタッフ紹介

情報・出版担当 助教 復本 寅之介

情報および出版の担当として2015年8月より研究科業務の一端を担っています。情報にまつわる業務としては、ネットワーク管理、GSID Webサイトやメーリングリストといった研究科として提供する情報サービスの構築と整備を行います。出版においては、紀要である国際開発研究フォーラムへの投稿対応から論文発行までのプロセス管理、ニューズレターの制作を担当します。



研究の専門は社会情報学です。教育・行政・ビジネス・芸術といった様々な分野における情報通信技術や最新技術の活用に関心を持ち、研究に取り組んでいます。身につけた技術や経験を活かして、より快適な研究科環境づくりに貢献できるよう力を尽くします。よろしくお願ひします。

国際協力専攻 准教授 石川 知子

2016年4月に国際協力専攻に着任しました。国際投資法を専門に研究しています。教育・研究の途に入ったのは比較的最近で、東京地方裁判所で判事補として勤務し、英国でLLM及びPh.Dを取得したのち、任期付公務員として外務省国際法局で勤務するなど、法律実務及び外交実務に携わってきました。研究活動に当たっては、自分の研究成果が与える実務的示唆は何かということを常に念頭に置いています。国際投資法は、様々な投資受入国の政治的、社会的及び法律的背景を知ることにより、理解が格段に深まる分野であり、多様な背景と経験を有する学生の皆さんとの交流を通じて、自分自身、たくさん学びを得られることを、とても楽しみにしています。



ウェルビーイング in アジアプログラム担当  
特任准教授 福永 敬

2016年4月より「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの特任准教授として着任いたしました。専門は東南アジア地域における持続的地域開発論で、特にボランティアやNGOによる住民支援に長年関わってきました。



これまでフィリピン大学留学後に青年海外協力隊に2回参加し、その後社会人採用で国際協力機構(JICA)に職員として30年近く国内外で勤務してきました。

在外経験では通算フィリピンに6年、インドネシアに4年、マレーシアとベトナムに各2年滞在しています。JICAの国際協力事業、特に国民参加事業(ボランティア・NGO支援)に関心がある方はぜひお気軽にご相談下さい。

ウェルビーイング in アジアプログラム担当  
特任助教 施 莉莉

2016年4月より「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの特任助教として着任いたしました。専門は高等教育学と地域イノベーション学です。博士前期課程・後期課程では、産学連携について研究していました。現在は産学連携における大学・企業・政府機関・教員の役割について日中比較研究をしております。



同プログラムでは、主にインターンシップ、アドミッション・リクルート、とカリキュラムに関する業務を担当しております。グローバルに活躍できる将来のリーダーたちの成長する場において、微力ながらもその育成事業のお手伝いができればと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

ウェルビーイング in アジアプログラム担当  
特任助教 新海 英史

2016年5月に、「ウェルビーイングinアジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの特任助教として着任しました。主に海外実地研修や国際連携業務を担当しています。修士・博士課程ではGSIDの国際協力専攻に在籍し、海外実地研修に参加し、またTAとして各種授業の補佐業務を行いました。デンマークやスウェーデンの日本大使館で専門調査員として勤務し、外務本省で日EU関係業務に携わりました。専門は移民研究、欧州各国の移民統合政策やEUレベルの移民・難民政策の動向に関心があります。何か困ったことがあれば遠慮なくお声がけ下さい。微力ながら皆さまのお手伝いが出来れば幸いです。



## 客員研究員の紹介

### 国内客員研究員

**H27 金村 久美**(名古屋経済大学経営学部・准教授)

研究課題: ベトナム人日本語学習者の発音における喉頭調節

期 間: 平成27年7月～平成27年9月

**白井 正敏**(中京大学経済学部・教授)

研究課題: 地方税の改革について

期 間: 平成27年8月～平成27年10月

**Eric McCready**(青山学院大学文学部英米文学科・教授)

研究課題: 日英語における直示・照応現象の研究

期 間: 平成27年10月～平成27年12月

**川島富士雄**(神戸大学大学院法学研究科・教授)

研究課題: 国有企業に対する競争中立性規律

期 間: 平成27年10月～平成28年3月

**佐藤 浩章**(大阪大学教育学習支援センター・副センター長)

大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部門・准教授)

研究課題: ファカルティ・ディベロップメントにおける国際協力

期 間: 平成27年10月～平成27年12月

**樋口 敏広**(京都大学白眉センター/法学研究科・助教)

研究課題: 「援助大国」日本の起源の再検討: 戦後初期の被援助国としての歴史経験に注目して

期 間: 平成27年10月～平成27年12月

**須網 隆夫**(早稲田大学大学院法務研究科・教授)

研究課題: EU法の立憲化と国際法

期 間: 平成28年1月～平成28年3月

**山口しのぶ**(東京工業大学学術国際情報センター・教授)

研究課題: 教育政策における21世紀型スキルの育成に関する国際比較研究

期 間: 平成28年1月～平成28年3月

**H28 小山田英治**  
 (同志社大学グローバル・スタディーズ研究科・教授)  
 研究課題: 開発途上国及び新興国における  
 政府のガバナンス問題  
 期 間: 平成28年4月～平成28年6月  
**Jonna P. ESTUDILLO** (政策研究大学院大学・教授)  
 研究課題: フィリピン農村部の貧困問題  
 期 間: 平成28年4月～平成28年6月  
**西川 芳昭** (龍谷大学経済学研究科・教授)  
 研究課題: 地域資源を活用した地域振興に関する研究  
 期 間: 平成28年4月～平成28年6月

**阿良田麻里子** (東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科・特任講師)  
 研究課題: インドネシアの食に関する都市と農村の比較研究  
 期 間: 平成28年7月～平成28年9月  
**小ヶ谷千穂** (フェリス学院大学・教授)  
 研究課題: 送り出しフィリピン社会の経験から考える、国際移動のジェンダー化された特質  
 期 間: 平成28年7月～平成28年9月  
**安元 佐織** (大阪大学人間科学研究科・講師)  
 研究課題: 日本における家族の変容に関する都市と農村の比較研究  
 期 間: 平成28年7月～平成28年9月  
**牛 承彪** (関西外国語大学・教授)  
 研究課題: 中国少数民族に関する生態学的研究  
 期 間: 平成28年10月～平成29年3月

外国人客員研究員

**H27 Nilar Aung** (ヤンゴン大学地理学科・教授)  
 研究課題: ミャンマー・ヤンゴン地域の都市近郊における  
 農村開発に見られる都市と農村の相互作用  
 期 間: 平成28年2月1日～平成28年3月31日  
**H28 Aser Javier** (フィリピン大学ロスバニョス校公共政策学部・准教授)  
 研究課題: フィリピンにおける持続可能な開発目標についての  
 ローカルな視点と挑戦  
 期 間: 平成28年4月1日～平成28年7月31日  
**Alireza Rezaee** (テヘラン大学外国語学部・助教)  
 研究課題: 任侠道の比較人類学的研究  
 期 間: 平成28年6月1日～平成28年8月31日  
**Joe Devine** (パース大学・上級講師/学科長)  
 研究課題: ウェルビーイング・不平等・貧困  
 期 間: 平成28年7月4日～平成28年8月30日

**Massimo Moneglia** (フィレンツェ大学文哲学部・准教授)  
 研究課題: 「行動」に関する汎言語的オントロジーの日本語への拡張  
 動詞語彙の類型的特徴とコーパスベースの概念モデルIMAGACTについて  
 期 間: 平成28年9月1日～平成28年10月31日  
**Arup Mitra** (インド経済成長研究所・教授)  
 研究課題: ジェンダー別・地域別労働市場参加に関する研究  
 期 間: 平成28年10月16日～平成29年3月15日  
**Reinhart Köbler** (フライブルク大学・非常勤教授  
 /前Arnold Bergstraesser Institute所長)  
 研究課題: 開発学・開発理論  
 期 間: 平成28年10月26日～平成28年11月27日  
**Cui Songzi** (大連海洋大学外国語学院・副教授)  
 研究課題: 比較言語学の視点から見る中日の礼儀文化  
 期 間: 平成28年11月1日～平成29年1月15日  
**Alan Libert** (ニューキャッスル大学・上級講師)  
 研究課題: アルタイ諸語におけるマイナーな品詞の語彙の多機能性  
 期 間: 平成29年1月16日～平成29年3月31日

スタッフの人事異動 (平成27年6月～平成28年5月)

**教員**  
 ■平成27年8月1日 着任  
 助教 復本寅之介  
 ■平成27年9月30日 退職  
 国際協力専攻 教授 川島富士雄  
 ■平成28年3月31日 退職  
 国際開発専攻 准教授 米澤 彰純  
 特任准教授 三牧 純子  
 特任助教 桑垣 隆一  
 特任助教 荻巣 崇世  
 ■平成28年4月1日 着任  
 国際協力専攻 准教授 石川 知子  
 特任准教授 福永 敬  
 特任助教 施 莉莉  
 ■平成28年5月1日 着任  
 特任助教 新海 英史

**事務**  
 ■平成27年10月1日 転出  
 総務G 竹谷 恵子 (農学部・生命農学研究科庶務係へ)  
 ■平成27年10月1日 転入  
 総務G 二村 希 (農学部・生命農学研究科庶務係から)  
 ■平成28年4月1日 転出  
 総務G 川原 弘美 (教育推進部基盤運営課へ)  
 図書G 浅見沙矢香 (附属図書館情報管理課へ)  
 教務G 徳田 香織 (医学部・医学系研究科学務課大学院係へ)  
 ■平成28年4月1日 転入  
 図書G 夏目弥生子 (文系総務課図書G(文)から)  
 教務G 石野 和子 (文系教務課教務G(文)から)

**協力教員の交代**  
 開発政策講座  
 旧: 佐藤 宣之 (大学院経済学研究科)  
 新: 西 聡 (同上)  
 教育発達講座  
 旧: 西野 節男 (大学院教育発達科学研究科)  
 新: 阿曾沼明裕 (同上)  
 比較国際法政システム講座  
 旧: 林 秀弥 (大学院法学研究科)  
 新: 大河内美紀 (同上)

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

## オープンキャンパス 2016 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス2016」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

**日時** 平成28年7月9日(土) **会場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)  
 (事前予約不要) 地図はホームページを参照ください。  
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

**内容** プログラム

(1) 留学生相談 11:00～14:00 (2) 施設見学 ● 図書室 11:00～13:00、14:00～16:00 ● 言語情報処理室(コンピュータールーム) 11:00～12:00、13:00～14:00 (3) 導入部 研究科紹介ビデオ上映 13:00～13:15 (4) 院生によるGSID紹介 13:15～13:50 院生による特色ある社会貢献活動、インターシップ体験談を含む	(5) 全体説明会 14:00～14:45 ● 専攻及び教育プログラムの特徴 ● GSIDの入学生の構成、就職先 ● 入学試験の説明 ● 公開講座の案内 ● リーディング大学院等の案内 など (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00 ● 各専攻別説明会(教育プログラムを中心に) ● 個別相談(教員と院生が対応) (7) 展示 11:00～16:00 海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など
---	---

**お問い合わせ先** / [opencampus@gsid.nagoya-u.a.jp](mailto:opencampus@gsid.nagoya-u.a.jp)